

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

著者名(日)	田坂 敦子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	2
ページ	99-113
発行年	1996-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000297/

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

田坂敦子

The Scope and Target of Negation in *WA*-marked Sentences in Japanese

Atsuko Tasaka

Summary

This paper argues the scope and the target of negation in Japanese with an NP/PP marked with the particle *WA*. It also includes their interpretations and their resulting implications. This paper will deal with three types of NP/PP+*WA*. It will also argue that the scope and target of negation and the interpretation of sentences are determined depending on the type of *WA* and the context. The rules argued in this paper are as follows :

- ① Thematic NP/PP+*WA* is outside the scope of NEG.
- ② This thematic NP/PP+*WA* may denote the meaning of the “contrastive theme.” The latter is also outside the scope of NEG. Here, the meaning is implicated by the *WA*-phrase in the sentence which can only be interpreted correctly in context.
- ③ Contrastive NP/PP+*WA* is inside the scope of NEG. In this instance, there are two possible interpretations : NP/PP-reading and VP-reading.

【キーワード】 否定のスコープ・否定の焦点・含意

0. はじめに

本論文は、NP（名詞句）、PP（後置詞句：名詞＋助詞）が「は」でマークされた否定文の、否定のスコープおよび否定の焦点の解釈と、その含意について考察するものである。

太田 (1980) の指摘にもある様に、理論的には、否定とは肯定と真偽価値を逆にするものであるが、単に肯定文に否定辞「ない」を付加しただけでは不自然な否定

言語科学研究第2号(1996年)

文になることがある。次の(1) (2)を見てみよう。

- (1) 私は昨日スーパーで牛乳を買った。
 (2) ? 私は昨日スーパーで牛乳を買わなかった。

(1)は自然な文であるが、これに対して、どこにも強調アクセントを置かない場合、(2)は不自然な文となる。これは、この否定文の中でどの部分が否定されているのかがはっきりしない為である。(2)の前提になるのは(1)であるが、(1)には「私は」「昨日」「スーパーで」「牛乳を」「買った」という、否定の対象になり得る五つの要素がある。これらの前提となる情報に対して、(2)で否定されているのがどの部分なのか分からないことから、(2)の不自然さが生まれる。(2)は、否定の焦点となる部分を次の(3)の様に「は」でマークすると、自然な文になる^(注1)。

- (3) a. 私は昨日はスーパーで牛乳を買わなかった。
 b. 私は昨日スーパーでは牛乳を買わなかった。
 c. 私は昨日スーパーで牛乳は買わなかった。
 d. 私は昨日スーパーで牛乳を買わなかった。(d:下線部に強調アクセント)

(3a~d)では、すべて(1)の肯定文が前提となり、これが否定されているのであるが、その中で、(3a)ではNP「昨日」に、(3b)ではPP「スーパーで」に、(3c)ではNP「牛乳」に、(3d)ではNP「私」にそれぞれ否定の焦点があり、それぞれ、例えば(3)の様な含意があると解釈される。

- (3') a. 昨日は買わなかったが、他の日には買った。
 b. スーパーでは買わなかったが、他の店で買った。
 c. 牛乳は買わなかったが、他の物は買った。
 d. 私は買わなかったが、他の人は買った。

この様に、否定文の中で「は」がNP/PPをマークすると、それによって否定の焦点が示され、又、その解釈に含意がある場合がある。本稿では、この点に注目して、NP/PPが「は」でマークされた否定文の、否定のスコープおよび否定の焦点、その含意の解釈について考察していく。

本稿では、否定文における「NP/PP+は」を、久野(1983)に基づいて「主題」

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

「主題の比較対照」^(注2)「対照」を表すものの三つに区別し、それぞれの場合の否定のスコープおよび否定の焦点、その否定文の持つ含意との関係について考察した。その結論は、以下の通りである。

- ① 「NP/PP+は」は「主題」を表す場合、否定のスコープに含まれない。
- ② 「NP/PP+は」は「主題の比較対照」を表す場合も否定のスコープに含まれない。しかし、そのNP/PPと比較対照される意味的に同類のNP/PPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈される。
- ③ 「NP/NP+は」は「対照」を表す場合、否定のスコープに含まれる。そしてそのNP/PPあるいはそのNP/PPを含むVPが否定の焦点となり、これと比較対照される意味的に同類のNP/PPあるいはVP（動詞句）を含む当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈される。

以下、1節では「否定のスコープ」「否定の焦点」の定義を述べ、2節で筆者の分析を述べることとする。3節は本稿のまとめである。

1. 「否定のスコープ」と「否定の焦点」の定義

分析に先立ち、本節では、本稿における「否定のスコープ」「否定の焦点」の定義を述べる。

本稿では、「否定のスコープ」「否定の焦点」をそれぞれ次の様に定義する。

- (4) 否定のスコープ：否定の意味的作用の及ぶ最大の範囲、作用域。
 否定の焦点：実際の文の解釈上、特に否定の対象となる部分。

これについて、(5)で考えてみよう。

- (5) 私は昨日、学校へは行かなかった。

(5)が表すのは、「私の昨日の行動について言うと、学校へ行くということをしなかった」ということであり、「ない」の否定の作用は“学校へ行った”ということにかかっていると考えられる。しかし、この(5)の意味解釈を次の(5'a,b)の様なコンテキストの中で考えると、実際に否定の対象となると解釈される部分は、(5'a)と(5'b)では異なっている。

- (5'a) 私は昨日、学校へは行かなかった。しかし、図書館へ行った。

言語科学研究第2号(1996年)

(5'b) 私は昨日、学校へは行かなかった。しかし、家で勉強した。

(5'a)における(5)は「“学校へ”というPPについては否定であるが、“図書館へ”というPPについては肯定である」、また、(5'b)では「“学校へ行った”というVPについては否定であるが、“家で勉強した”というVPについては肯定である」という意味解釈がなされる。このように、同じ否定文でも二通りの解釈ができるのは、“学校へ”というPPが「は」でマークされることにより、対照の意味を表すからである。このように、「は」でマークされた「NP/PP+は」が対照を表す場合の否定文では、それと比較対照される、意味的に同類の事柄についての肯定が含意される。(5'a)では、“学校へ”と比較対照される意味的に同類の事柄“図書館へ”についての肯定、(5'b)では、“学校へ行った”と比較対照される意味的に同類の事柄“家で勉強した”についての肯定がそれぞれ含意されている。このような二通りの解釈については、McGloin (1986) が、否定の意味作用がNPにかかる場合とVPにかかる場合とを指摘している。これについては2.3.で述べる。

(5)の実際の解釈は、(5'a)と(5'b)とでは異なっているが、しかし、いずれの解釈であっても、否定の対象となる部分は、コンテキストに関係なく(5)で否定される“学校へ行った”ということであり、これを超えることはない。つまり、“学校へ行った”が、否定の意味作用がはたらく領域としては最大であるということである。この様な、否定の意味的作用の及ぶ最大の範囲、作用域のことを、本稿では「否定のスコープ」と定義する。そして、否定のスコープがかかる部分の中で、実際の解釈上、特に否定の対象となる部分を「否定の焦点」と定義する。(cf. 加藤, 1989, Trask, 1993 他) つまり、(5'a)では“学校へ”(5'b)では“学校へ行った”の部分が「否定の焦点」であると考えられる。本稿では、以上の様な定義に基づいて「否定のスコープ」「否定の焦点」について論じていくこととする。

2. 分析

本節では、NP/PPが「は」でマークされ、「主題」「主題の比較対照」「対照」を表すそれぞれの場合の、否定のスコープ、否定の焦点、その文の含意の解釈について述べる。

「主題」とは、文の、それについて述べるテーマ、トピックとなるもの、「対

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

照」とは、コンテクストに明示あるいは含意される、意味的に同類の他のものがあることを示すもの、「主題の比較対照」とは、主題を表すが、同時に、その主題と比較対照され、コンテクストに明示あるいは含意される、意味的にそれと同類の他のものがあることを示すものである。(cf. 久野，1983)

以下、2.1.でNP/PPが「は」でマークされ「主題」を表す場合、2.2.ではNP/PPが「は」でマークされ「主題の比較対照」を表す場合について述べ、両者は否定のスコープに含まれないことを指摘する。さらに2.3.では、NP/PPが「は」でマークされ「対照」を表す場合について述べる。

2.1. 「NP/PP+は」が「主題」を表す場合

ここでは、NP/PPが「は」でマークされ、「主題」を表す場合の否定のスコープとその否定文の解釈について述べ、主題は否定のスコープに含まれないことを指摘する。ここでの指摘は、「主題は否定のスコープに入り得ない」という久野(1983)の分析と通ずるものである。

まず、「NP/PP+は」が主題を表す場合の例として(6)を見てみよう。

(6) (イギリスへ行く前に英語を勉強したのかと聞かれて)

英語は、勉強しなかった。でも、イギリスに住んでいるうちに話せるようになった。

(6)の「英語は、勉強しなかった」は、「英語について言うと、勉強しなかった」の様に解釈され、他の含意は感じられない。ここでの“英語は”は「主題」を表すものであると言える。この文で「ない」が否定するのは“勉強した”ということであり、“英語は”ではない。(6)の「英語は、勉強しなかった」が問題としているのは「勉強したか、しなかったか」であり、“英語は”というのはその問題の外にある。つまり、否定のスコープは“勉強した”のみにかかり、“英語は”にはかからないと考えられる。

次に、「PP+は」が「主題」を表す否定文の例として、(7)を見てみよう。

(7) a : 太郎君と、会って話したの？

b : 太郎君とは、会わなかった。でも電話で話したよ。

言語科学研究第2号(1996年)

(7b)の「太郎君とは、会わなかった」は、「太郎君について言うと、会わなかった」の様に解釈され、他の含意は感じられない。ここでの“太郎君とは”は、比較対照の意味は表さず、単なる「主題」を表すと言える。ここで「ない」が否定するのは“会った”ということであり、“太郎君とは”ではない。(7b)の「太郎君とは、会わなかった」が問題としているのは「会ったか、会わなかったか」であり、“太郎君とは”というのはその問題外にある。つまり、否定のスコープは“会った”のみにかかり、“太郎君とは”にはかからないと考えられる。

あることについて何かを述べる場合、その述べられる主題自体が否定されるということは、概念として不自然である。だから、「主題」を表す「NP/PP+は」の部分が否定されるということは理論的にありえないのである。これは久野(1983)も述べている通りである。このことから、次の仮説Ⅰを提出する。

(8) (仮説Ⅰ)

「NP/PP+は」は、「主題」を表す場合、否定のスコープに含まれない。

以上が「NP/PP+は」が「主題」を表す場合についての考察である。次に、「NP/PP+は」が「主題の比較対照」を表す場合について述べる。

2.2. 「NP/PP+は」が「主題の比較対照」を表す場合

本セクションでは、2.1.で述べた「NP/PP+は」が「主題」を表す場合と同様に、「NP/PP+は」が、「主題」を表しながらもその主題自体に比較対照される他のものがあることがコンテキストから読み取れる、「主題の比較対照」を表す場合もまた、否定のスコープに含まれないことを指摘し、さらにその「NP/PP+は」は、否定のスコープには含まれないが、その「は」でマークされたNP/PPと比較対照される意味的に同類のNP/PPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意されるという仮説Ⅱを提出する。

まず、「NP+は」が「主題の比較対照」を表す例として、(9)を見てみよう。

(9) a : 太郎と花子が来るの？

b : 太郎は来ないよ。

(9b)では、“太郎”が「は」でマークされ、“花子”と比較対照される意味的に

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

同類のNPとして述べられており、「花子について言うと、来る。太郎について言うと、来ない」という意味であると解釈される。ここで“太郎は”は否定文それ自体においては“来ない”という述部についての主題を表しているが、このコンテキストにおいては“花子”と比較対照されるNPとして述べられている。つまり、ここでの「NP+は」は、主題を表しながら対照の意味をも表す、「主題の比較対照」を表すものとなっている。このように、その解釈はコンテキストとの関わりによって決まるものである。

(9b) の否定のスコープについて考えてみよう。この文で比較対照されるNPは「は」でマークされた“太郎”と、“花子”である。しかし、否定のスコープは“太郎は”にかかると言えるだろうか。(9b) の否定文が意味するのは、「太郎について言うと、来るという行為をしない」ということであり、「来るという行為をするのは、太郎ではない」ということではない。つまり、“太郎”ではなく、“来る”という行為が否定されているのである。この文は「花子は来る」という含意を持つが、これは“太郎”と比較対照される、意味的に同類のNP“花子”については“来る”ということであって、“太郎”に関しては“来る”ということは否定される。したがって、(9b) の「ない」の否定のスコープがかかるのは“太郎は”ではなく、“来る”であると考えられる。これを以下の様に示す。

(10) 否定のスコープがかかる部分：“来る”

含意：[花子が来る]

このように、「NP+は」は、「主題」を表しながらもそれと比較対照される他のものがあることが読み取れるようなコンテキストの中では、「主題の比較対照」を表し、この場合も「主題」を表す場合と同様、否定のスコープに含まれないと言える。しかし、コンテキストの中でそのNPと比較対照される、意味的に同類のNPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈されるのである。

次に、「PP+は」が「主題の比較対照」を表す例として、(11) を見てみよう。

(11) a： 太郎と花子に、手紙を書いたの？

b： 太郎には、書かなかったよ。電話をしたんだよ。

(11b) では、“太郎に”が「は」でマークされ、“花子に”と比較対照される意

言語科学研究第2号(1996年)

味的に同類の PP として述べられており、「花子について言うと、書いた。太郎について言うと、書かなかった」という意味である。ここで“太郎には”は否定文それ自体においては「書かなかった」という述部についての主題を表しているが、このコンテキストにおいては“花子に”と比較対照される PP として述べられている。つまり、ここでの「PP+は」は、主題を表しながら対照の意味をも表す、「主題の比較対照」を表すものとなっている。

(11b) の否定文が意味するのは、「太郎について言うと、書くという行為をしなかった」ということであり、「書くという行為をしたのは、太郎にではない」ということではない。つまり、“太郎に”ではなく、“書いた”が否定されているのである。この文は「花子には書いた」という含意を持つが、これは“太郎に”と比較対照される、意味的に同類の PP “花子に”については“書いた”ということであって、(11b) の否定文自体が“書いた”ということを肯定しているわけではない。このように、(11b) で否定のスコープがかかるのは“書いた”であると考えられる。これを以下の様に示す。

(12) 否定のスコープがかかる部分：“書いた”

含意：[花子に書いた]

このように、「PP+は」がコンテキストの中で「主題の比較対照」を表す場合も、NPの場合と同様、否定のスコープに含まれないと言える。しかし、コンテキストの中でその PP と比較対照される、意味的に同類の PP を含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈されるのである。

以上より、(13) の仮説Ⅱを提出する。

(13) (仮説Ⅱ)

「NP/PPP+は」は「主題の比較対照」を表す場合、否定のスコープに含まれない。しかし、その NP/PP と比較対照される意味的に同類の NP/PP を含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈される。

久野 (1983) は、「主題」は否定のスコープに入らないとし、「主題の比較対照」を表す場合もまた否定辞のスコープ外にあるとした。否定のスコープと主題を表す

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

「は」との関係についての筆者の分析は、これと同じであると言える。ただし、久野 (1983) の分析では、その文の持つ含意との関係については指摘されていない。

また、McGloin (1986) は、(14) の例を挙げ、これは (14') の様な解釈ができるとしている。

(14) (「花子は昨日メリーと学校へ行った?」という質問に対して)

ううん、花子は行かなかった。

(14') 否定のスコープがかかる部分：“花子”

含意：[他の人がメリーと学校へ行った]

この様に、McGloin (1986) は、「NP+は」は、「比較対照の主題」を表す場合、否定のスコープに含まれ、それと対照的な項目についての肯定の含意があると分析している。

しかし、筆者は、(14) の“花子”に否定のスコープがかかるとは言えないと考える。(14) で表されている意味は「花子について言うと、メリーと学校へ行くという行為をしなかった」ということであり、「メリーと学校へ行くという行為をしたのは花子ではなかった」ということではない。この文には「他の人について言うと、メリーと学校へ行くという行為をした」という含意があるが、これはNP “花子” と比較対照される、意味的に同類の NP “他の人” についてのことであり、(14) の否定文自体が意味する事実としては、“行った” ということが否定されるはずである。したがって、(14) の否定のスコープは“行った” にかかり、“花子” と“他の人” が比較対照されるのだと考えるべきであろう。これを (14'') の様に示す。

(14'') 否定のスコープがかかる部分：“行った”

含意：[他の人がメリーと学校へ行った]

この様に、筆者の分析はMcGloin (1986) のものとは異なる。

また、(14) では、“花子” と“他の人” が、比較対照される、意味的に同類のNPとして解釈されるが、この“他の人” には二通りの解釈が可能であることをここで指摘しておく。一つは、McGloin (1986) の指摘した解釈の様に「花子以外の誰かがメリーと学校へ行った」ということが含意されるという解釈である。これは (15) の様なコンテキストの場合である。

言語科学研究第2号(1996年)

(15) a：花子は、メリーと学校へ行ったの？

b：ううん、花子は行かなかった。太郎は行ったけどね。

このようなコンテキストにおいては、(15') のような解釈がなされる。

(15') 否定のスコープがかかる部分：“行った”

含意：[太郎がメリーと学校へ行った]

もう一つは、「花子は行かなかったが、メリーは行った」の様に、“他の人”が“メリー”を指すという解釈である。これは(16)のようなコンテキストの場合である。

(16) a：花子は、メリーと学校へ行ったの？

b：ううん、花子は行かなかった。花子は、昨日から熱を出して、寝ているんだよ。だから、メリーは一人で行ったよ。

(16) では、“学校へ行った”の動作主として“花子”と“メリー”のみが問題とされている。この場合、否定のスコープは(15)と同様、“行った”にかかるが、NP“花子”と対照的な、意味的に同類のNPは、“メリー”であると解釈されるのである。これは(16')の様に示される。

(16') 否定のスコープがかかる部分：“行った”

含意：[メリーが学校へ行った]

(15) (16)からも分かる様に、含意の解釈にはコンテキストが深く関わる。ただし、いずれの解釈にしても、“花子は”には否定のスコープはかからない。しかし、否定のスコープはかからないが、NP“花子”と対照的な、意味的に同類のNPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意されると解釈できる。(15b)で言えば「太郎がメリーと学校へ行った」、(16b)で言えば「メリーが学校へ行った」がこれに当たる。これらの例からも、(13)の仮説Ⅱは妥当であると言えよう。

以上が、「NP/PP+は」が、「主題の比較対照」を表す場合についての考察である。次に、「NP/PP+は」が「主題」を表さず、「対照」の意味を表す場合について考察する。

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

2.3. 「NP/PP+は」が「対照」を表す場合

ここでは、「NP/PP+は」が主題を表さず、「は」でマークされたNP/PPと比較対照されるものがあることを示す場合、すなわち「対照」を表す場合の否定文について考察する。「NP/PP+は」は、文の中で、主題を表さない場合、コンテキストに明示あるいは含意される、それと対照的な他のものがあることを意味する。例として (17) を見てみよう。

(17) a : 太郎は、好き嫌いをせずに、なんでも食べるんでしょう？

b : いや、太郎は、鶏肉は食べないよ。

(17b) は、「太郎について言うと、鶏肉は食べない」という意味であり、「NP+は」である“太郎は”は主題を表しているが、同様に「NP+は」である“鶏肉は”は主題を表すものではない。そして、「鶏肉は食べない」には、このコンテキストにおいては、それと対照的な「他のものを食べる」という含意があると解釈される。このように、「NP+は」は主題を表さない場合、「対照」の意味を持つと言える。ここでは、この様に「NP+は」が「対照」を表す場合について考察する。

(17b) は、本来「を」でマークされる目的対象の“鶏肉”が「は」でマークされており、「太郎について言うと、鶏肉を食べるという行為は行わない」という意味である。すなわち、“鶏肉を食べる”ということが否定されているのである。つまり、否定のスコープは“鶏肉を食べる”ということにかかっているのである。このように、「NP+は」は、主題を表さず「対照」を表す場合、否定のスコープに含まれる。

「は」が付加することにより、(17b) には、「鶏肉を食べるという行為については否定であるが、その他のものを食べるという行為については否定にならない、つまり肯定である」という含意がある。つまり、「は」によってマークされたNP“鶏肉”が否定の焦点となり、それと比較対照される意味的に同類のNP“その他のもの”を含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）すなわち「その他のものを食べる」が含意されるのである。これは (18) の様に示される。

(18) 否定のスコープがかかる部分：“鶏肉を食べる”

言語科学研究第2号(1996年)

否定の焦点：“鶏肉”

含意：[他のものを食べる]

この様に、「は」でマークされたNPは、「対照」を表す場合、否定のスコープに含まれて否定の焦点となり、そのNPと比較対照される意味的に同類のNPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意されとも言える。

これは、「PP+は」の場合も同じである。(19)を見てみよう。

(19) a： 買い物に行くそうだけど、渋谷へ行くの？

b： ううん、渋谷へは行かないよ。

(19b)は、「渋谷へ行くという行為は行わない」という意味であり、“渋谷へ行く”ということが否定されている。そして、ここでの“渋谷へ”は、主題を表すものではない。また、「渋谷へは行かない」には、このコンテクストにおいては、それと対照的な「他の場所へ行く」という含意があると解釈される。このように、「PP+は」も、NPの場合と同様に、主題を表さない場合、「対照」の意味を持ち、この場合は否定のスコープに含まれるとも言える。

「は」が付加することにより、(19b)には、「渋谷へ行くという行為については否定であるが、他の場所へ行くという行為については否定にならない、つまり肯定である」という含意がある。つまり、「は」によってマークされたPP“渋谷へ”が否定の焦点となり、それと比較対照される意味的に同類のPP“他の場所へ”を含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）すなわち「他の場所へ行く」が含意されるのである。これは(20)の様に示される。

(20) 否定のスコープがかかる部分：“渋谷へ行く”

否定の焦点：“渋谷へ”

含意：[他の場所へ行く]

この様に、「は」でマークされたPPも、NPの場合と同様に、「対照」を表す場合、否定の焦点となり、そのPPと比較対照される意味的に同類のPPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意されとも言える。

しかし、以下の例の「NP/PP+は」も「対照」を表すが、否定の焦点は「は」で

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

マークされたNP/PPだけとは限らない。(21)を見てみよう。

(21) a：明日、みんなで映画を見に行くの？

b1: ううん、映画は見ないよ。お芝居を見るんだよ。

b2: ううん、映画は見ないよ。テニスをするんだよ。

(21b1, b2)では、どちらも、NP“映画”が「は」でマークされている。この否定文は(21b1)では「映画は見ないが、他のものを見る」という解釈、つまり“映画”が否定の焦点であるという解釈がなされるが、(21b2)では「映画は見ないが他のことをする」という解釈、つまり“映画を見る”というVPが否定の焦点となるという解釈がなされる。この様に、NPが「は」でマークされ、対照を表す場合、否定の焦点が「は」でマークされたNPであると解釈される場合と、そのNPを含むVPであると解釈される場合とがある。そして、その判断は、この場合コンテキストによる。McGloin (1986) は、前者をNP スコープ、後者をVPスコープとしてこの様な二通りの解釈があることを指摘している。

(21) はNPの例であったが、PPの場合も同様である。(22)を見てみよう。

(22) a：明日、みんなで映画に行くの？

b1: ううん、映画には行かないよ。コンサートに行くんだよ。

b2: ううん、映画には行かないよ。テニスをするんだよ。

(22b1, b2)では、どちらも、PP“映画に”が「は」でマークされている。この否定文は(22b1)では「映画には行かないが、他の所に行く」という解釈、つまりPP“映画に”が否定の焦点であるという解釈がなされ、(22b2)では「映画には行かないが他のことをする」という解釈、つまりVP“映画に行く”が否定の焦点となるという解釈がなされる。この様に、PPが「は」でマークされ、対照を表す場合も、否定の焦点が「は」でマークされたPPであると解釈される場合と、そのPPを含むVPであると解釈される場合とがある。そしてこの場合もその判断はコンテキストによる。

この様に、「NP/PP+は」が「対照」を表す場合の否定文では、「は」でマークされたNP/PPを含むVPが否定の焦点となる場合もある。

以上のことから、次の(23)の仮説Ⅲがたてられる。

言語科学研究第2号(1996年)

(23) (仮説Ⅲ)

「NP/PP+は」は「対照」を表す場合、否定のスコープに含まれる。そしてそのNP/PPあるいはそのNP/PPを含むVPが否定の焦点となり、これと比較対照される意味的に同類のNP/PPあるいはVPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈される。

4. 結び

本稿では、NP/PPが「は」でマークされた否定文の、否定のスコープおよび否定の焦点、その否定文の含意の解釈について考察した。以下に結論をまとめる。

「NP/PP+は」は、「主題」を表す場合は否定のスコープに含まれない。またコンテキストの中で、「主題」を表しながらそれと比較対照されるものがあることを表す場合、すなわち「主題の比較対照」を表す場合にも、否定のスコープに含まれない。しかし、後者の場合には、そのNP/PPと比較対照される意味的に同類のNP/PPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈される。また、「NP/PP+は」は、「対照」を表す場合は、否定のスコープに含まれる。そして、そのNP/PPあるいはそのNP/PPを含むVPが否定の焦点となり、これと比較対照される意味的に同類のNP/PPあるいはVPを含む、当該の否定文と対立する事柄（肯定）が含意として解釈される^(注3)。

【注記】

- (1) 「私は昨日スーパーで牛乳を買いはしなかった」という、動詞に「は」が付加するものについては今回は扱わない。
- (2) 久野(1983)では「比較対照の主題」とされているが、本稿では、主題自体と他のものの比較であるという意味を明白にするため、「主題の比較対照」とした。
- (3) 「対照」を表す場合、どのような場合に焦点がNP/PPになり、どのような場合にVPになるかについての考察は別稿に譲ることとする。

付記： 本稿は、1995年神田外語大学に提出した修士論文の一部に手を加えたものである。指導教官の徳永美咲先生をはじめとする諸先生方に心より感謝したい。

「は」と否定のスコープ・否定の焦点

【参考文献】

- 井上 和子 (1989) 「「は」と「が」：統語構造と談話構造」井上和子編『日本文法小辞典』(大修館書店)
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』(大修館書店)
- 加藤 泰彦 (1989) 「否定のスコープ」井上和子編『日本文法小辞典』(大修館書店)
- 久野 暲 (1983) 『新日本文法研究』(大修館書店)
- 丹保 健一 (1980) 「否定表現の文法 (1) 否定内容と文構造とをめぐって」『三重大学教育学部研究紀要』31
- 仁田 義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』(くろしお出版)
- 益岡 隆志 (1991) 「疑問と否定のスコープ」益岡隆志『モダリティの文法』(くろしお出版)
- McGloin, Naomi Hanaoka(1986) “Negation in Japanese”
(Boreal Scholarly Publishers and Distributors Ltd.)
- Miller, George A. and Jhonson-Laird, Philip N.(1976)
“Language and Perception” (Harverd University Press)
- Ross, Claudia(1978) “The Rightmost Principle of Sentence Negation” CLS 14
- Trask, Robert Lawrence (1993) “A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics”
(Routledge)